

光といのち

第137号

—秋彼岸—

2022年9月10日発行

発行所

真宗大谷派勝善寺

〒299-2214

千葉県南房総市二部1344

電話 0470-57-2657

FAX 0470-57-2290

Eメール info@syozenji.or.jp

URL <http://syozenji.or.jp/>

住職 釋孝昌

宝の山に入りて、
手を空しくして、
帰ることなかれ。

源信僧都



9月5日6時～ 月曜朝のお勤め

題字下の言葉は、地獄の有様を詳しく書いた書として有名な『往生要集』にあります。仏教の道理から人生を顧みれば、この人生は「宝の山」。せっかく人間に生まれ仏教に遇うチャンスを得たのだから、空しく終わるようなことがあってはならない、という意味です。ところが私たちは、理性や感情で人生を省みますから、老を感じ病いを患いやがて死んでいく人生を、寂しく悲しく思います。ふだんは、このことを都合よく忘れていますが……。

『今昔物語』に「信濃守藤原陳忠御坂より落ち入る語」があります。

「信濃守」は、信濃国（長野県）の政治を任された地方官の

ことです。「受領」とも呼ばれ、今の県知事に当たります。しかし、選挙で選ばれ住民の福利を職責とするわけではありません。任期中に税金を取れるだけ取ることを任務としていました。古典や日本史の教科書でこの説話を扱いますので、ご存じの方も多いと思います。

藤原陳忠は、信濃守の任期を終え都（京都）へ帰る途中、御坂（今の神坂峠）で馬が足を踏み外し馬もろともに深い谷底に落ちてしまいました。

家来たちは、死んだに違いないと思いましたが、谷底から「箆を下ろせ」と声が聞こえてきました。

そこで箆を下ろし引き上げると、なんと箆一杯に平茸が入っています。そして次ぎに箆を下ろすと、今度は主人が片手で縄をつかみ、もう一方の手には平茸を三房ばかり握って上がってきました。

家来たちは無事を喜びました。平茸のことをいぶかしく思い、その訳を訊ねたのでした。

そうすると信濃守は、「馬は

谷底まで落ちたが、私は途中の茂みに引っかけり助かった。周囲を見ると平茸がたくさん生えていたので採れるだけ採ったが、まだまだ沢山残っている。大損をした思いだ」と真面目に述べたので、家来たちは呆れて大笑いしたのでした。すると信濃守は、「おまえたちは考え違いをしているぞ！」と、厳しくたしなめました。

「私は、宝の山に入りて、手を空しくして、帰る思いである。

『受領は倒るる所に土をもつかめ』と言うではないか」と。

受領の任務は、これぐらいの食欲が必要だと言いつたのです。

この話しを源信僧都に戻せば、空しく人生を終わらないためには、自分の人生に食欲であれということでしょう。

ただし、仏教の道理にうなずくチャンスは、その時々理性や感情を自分だとしている間は訪れません。

南無阿弥陀仏



平茸

一生は尽くといえども、
希望は尽きず。

源信僧都

表紙題字下の言葉は、この標題に続く文章の終わりにあります。

その内容を、私流に書きました。

はげ頭になつて一生は尽きようとしているのに、自我(エゴ)を私として生きているので、夢や希望が尽きない。

損得勘定やプライドにこだわりの、世間体が気になり、自分は正しく他が間違っていると思ひ込み、その思いに縛られ、それに振り回され、浮いたり沈んだりしてる。

あるいは自己満足を「幸せ」と疑わず、それを得ることを当然の権利と思つている。

たまにはその「幸せ」を感じる

こともあるが、それが壊れることに怯え、不安は募るばかり。ここに偽物の宗教が入り込む隙があるのですよね。

一人ひとりが自由に平等に幸せに生きられる社会は、人類の理想。その実現に向かって世界は進歩していくものだと生きてきましたが、皮肉にもその正義が戦争を長引かせ人々を苦しめている。

この納得できない人生を空しく終わらないためには仏教の道理に順う以外にない。と確信します。

「宝の山に入りて、手を空しくして 帰ることなかれ」。

次の文章は『大谷大学ホームページ』からの転載です。

自殺するしかないと思ひ詰めていた人が、仏教の道理に遇い、取り止めにした話です。

宝の山に入りて、
手を空しくして、
帰ることなかれ。

ある俳優がテレビの中で次のような話をしていました。

18才になる青年が、人生上の問題で行きづまり、自殺しようとして一人の僧侶を訪ねました。青年は、「自分はもう生きていくことができないので自殺しようと思うが、自分の葬式をして欲しい」とお願いしました。

するとその僧侶は、「君が自殺までしようとするからには余程のことがあるにちがいない、葬式は挙げるから心配しないでよい、ただ今日まで生きてきていろいろお世話になったのだからお礼だけは

言ってきたさい」と論（さと）したのだそうです。

青年はなるほどと思ったのか、「両親ともう一人の某にはお礼を

言ってきました」、と言って立ち去ろうとした。すると僧侶は、間髪を入れず、「君は学校へ行っていただろう、学校では誰のお世話にもなっていないのか。君は毎日ご飯を食べてきただろう、お米や魚のお世話になってきたのではないか」、と次々質問しました。

青年は自分がお礼すべきことどもがあまりにも多くて、お礼し切れないことに気づき自殺できなくなったのだそうです。

この話は、自分自身に対する私たちの根本的な誤解をとでもわかりやすく教えてくれます。

私たち一人一人は、もともと考え尽くせないほどの無限の用（はたら）きによって成り立っています

す。このことに思いが及ぶならば、実は私たち一人一人には既に無限の宝が与えられていることに気づくはずです。

それにもかかわらず、私たちは、自分が今、ここに生きてあることをあまりにも当然のこととしているので、それだけでは満足できないような心を持って生きています。普段の生活の中で、自分と他人を比較して、なんとなく何か足りないという感情に悩まされることは、誰にとっても身近なことでしょう。

それ故、私たちはその足りない「何か」を求めて日々苦勞しています。しかしよく考えてみましょう。何か足りないという感情は、裏返せば足りないものが何であるのか分からないということと同じなのではないでしょうか。

自分が何を求めているのか分からなければ、どのようなものを手

に入れても決して満たされることがないのは当然でしょう。

このようにして求めても求めても決して満たされることのない生き方を空しいむないと言うのでしよう。本当は宝の山である人生を空しく過ごさねばならないのは何故なのでしょうか。

表題の一文はそこまで触れていませんが、私たちが自分の勝手な考えや都合にしばられて、本当は無限の用きによって成り立っているという自分自身の事実を忘れてしまっていることにあると断言できます。そしてここに立って初めて、誰にも代わるることのできない、また代わる必要のない人生の発見があると教えているのです。

仏法は聴聞ちようもんにきわまる

蓮如上人

ご予約ください

報恩講に向けて

役員会 10月1日 13時30分
世話人総会 10月23日 13時30分
仏具磨き 11月14日 13時30分
報恩講準備 11月18日 13時30分
速夜 18日 15時
晨朝 19日 6時過ぎ
日中 19日 10時

秋彼岸会 秋分の日
9月23日 (金)
修正会
1月2日(月)
春彼岸会 春分の日
3月21日 (火)
盂蘭盆会
8月10日 (木)
時間 10時〜11時30分

千葉組主催ズーム親鸞教室
みな様は、どういう目的で法話を聴聞してますか。

今年は「聞法の姿勢」を共通テーマにして各先生にお話しいただきます。

浄土真宗は、毎日の生活が仏道です。
すから、この「姿勢」が肝要です。

瓜生 崇 先生

京都教区近江第八組玄照寺住職

10月25日 (火)

12月14日 (水)

黒萩 昌 先生

北海道教区南第三組法誓寺住職

1月17日 (火)

2月9日 (木)

百々海真先生

東京教区東京六組了善寺住職

4月14日 (金)

5月18日 (木)

時間 13時〜16時

※ズームで配信しますので、本堂でもご自宅でも聴聞できます。
詳細はお問い合わせください。

仏教を聞き語り合う会

同朋の会

第1回 10月9日 (日)

第2回 2月12日 (日)

第3回 4月9日 (日) 花まつり

第4回 5月14日 (日)

第5回 7月23日 (日)

講師 住職
時間 14時〜16時
参加費 500円
※ズームで配信します。

勝善寺聞法会

第1回 12月11日 (日)

第2回 6月4日 (日)

講師 副住職
時間 14時〜16時
参加費 500円
※ズームで配信します。

地区聞法会

八日講十日講 9時〜11時

1月8日 (日) 6月8日 (木)

中佐久間講

5月19日 (金) 13時半〜15時半

月曜朝のお勤め

毎週月曜日6時〜

正信偈などを一緒にお勤めします。「御文」を拝読した後に、住職の法話があります。

奉仕作業 6月11日 (日)

8時30分から二時間程度
作業は草刈りとガラス拭きなど

除夜の鐘 12月31日 23時45分

※勝善寺所属のご門徒(お檀家)以外の方の参加も歓迎します。
ただし、地区聞法会を除きます。
仏教に感動した喜びを多くの方に味わっていただきたいからです。

秋彼岸会

9月23日 (金)

秋分の日

10時〜11時30分

※毎年秋彼岸に護持金(付届)をお納めの方、本堂で受付けています。
玄関は閉めてありますのでご承知ください。

